OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「説明」の心理的機能を巡る諸問題
Author(s)	外山, みどり
Citation	対人社会心理学研究. 2017, 17, p. 103-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67201
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「説明」の心理的機能を巡る諸問題

外山　みどり(学習院大学文学部)

本稿では、説明に関する過去の研究をレビューすると同時に、説明の心理的機能に関する諸問題について考察する。日常生活における説明は、心理的、社会的に重要な役割を果たす。説明には、記述的説明、道徳性の説明などがあるが、中心となるのは因果的説明であり、この問題は社会心理学において、帰属過程の研究として広く検討されてきた。多くの研究が因果推論の方式を明らかにしてきたが、因果関係の根本に関してはいくつかの問題が残されている。例えば原因と理由の違い、内的-外的帰属の区分、原因の連鎖とその遡求などである。従来の科学的説明の多くは、直接の先行因である至近要因による説明であったが、近年の進化心理学的見解は究極要因による説明の可能性を示している。説明の心理的機能に関してみると、説明は周囲の世界に対する理解を得ようとする人間の基本的な心理傾向に支えられており、安定した認知をもたらすという意味で重要であるが、他方で偶然事象に意味を見出すなど誤った説明に陥ることもある。また意識されない心的過程を言語的に説明することの負の効果もある。説明の心理学的な意味については、今後更に幅広く検討する必要がある。

キーワード:帰属過程、因果関係、理由、記述、誤認知

近年、さまざまな場面で「説明責任」が問われることが多くなっている。その背景には、政治・経済・司法・科学技術など各方面に対して、一般人が十分な理解をもつことが必要であり、的確な理解を得るためには関連する情報が十分に公開されるべきであること、事態の推移や原因・発生機序に関する納得のいく説明がなされるべきであることに関して、共通の認識が形成されてきた状況が存在すると考えられる。このような意味での「説明」は、社会的な場面、あるいは対人場面で、特定・不特定の他者に向けて表明される言語的な陳述を指すが、他方、自身の内部に生じる疑問に対して、個人内でなされる説明もある。われわれは、さまざまな不可解な出来事や現象に対して説明を追究する。それは理解と納得に到達するためのプロセスであり、個人内においても「説明」はきわめて重要な役割を果たす。本稿では、さまざまな事柄に対して説明を求める人間の傾向、説明の種類と方向、説明がもたらす心理的機能などについて、主に社会心理学の研究を手がかりにして考えてみることにしたい。

日常生活における説明

対人場面での説明

「説明」の問題は、次節で述べる因果的説明と帰属過程に関する研究を除けば、従来の社会心理学において、あまり正面から研究の対象とされてこなかったと言える。しかし、日常生活で人々は多くの問題について説明を試みる。対人間で交わされる日常の会話の中でかなりの部分が、天候などの自然現象、事件や事故、政治や経済の動向、スポーツの結果などさまざまな事象に関する説明に費やされている。共通の関心事に対して、その説明を語り合うことは、出来事についての理解を深めることにつながると同時に、対人間での知識と見解の共有につながり、コミュニケーションを盛り上げる作用を果たす。

説明に関する研究が比較的少ない中で、対人場面において会話を通して交わされる説明については、主にヨーロッパの社会心理学者、社会学者の間で論議されてきた。Antaki(1981)は、一般の人々が社会行動や社会現象をどのように説明するか、そのような説明は社会的関係の中でどのような役割を果たすか、そしてそこではどのような説明が好まれ、いかなる言語的レトリックが使われるかなどの問題を、社会心理学だけでなく、哲学、人類学、社会学などの観点から検討した論述を集めた書籍を編んでいる。日常会話の分析などをもとにして得られた結果からは、人々が共通の関心事に対して説明となる言説を交換すること、単なる客観的な記述や因果的推論というよりも、説明者の動機づけに応じた説明がなされ、また聞き手を納得させるような説明、聞き手に好まれるような説明が選ばれやすく、面白い説明になるような表現の工夫もなされやすいことがわかっている。

日常場面での説明のタイプ

日常生活において一般の人々が行う説明に関して、Antaki & Fielding(1981)は、記述的説明、因果的説明(原語では agentic explanation)、道徳性の説明の 3 つのタイプを挙げている。

第1のタイプの記述的説明は、「何が起こっているのか？」という問いに対する答えであり、出来事や現象に、聞き手が理解できるような名称を与えるラベルづけの機能を果たす説明である。これは客観的な事実の記述であるように見えるが、それ自体の中に何らかの解釈や評価を含んでいる場合もあり、そうなると因果的説明の要素をもつことになる。

第2のタイプの説明である因果的説明は、「なぜそれが起こったのか？」という疑問に対する答えを与えるもので

あるが、これは以下で述べる帰属研究で広範囲に検討されてきた問題である。ただしAntaki & Fieldingは、単なる因果推論としてではなく、社会的な場面でなされる説明としての機能と役割に注目している。

Antaki & Fieldingが挙げる第3のタイプの説明は、道徳性の説明であり、このタイプの説明で説明者は、行為を弁護したり非難したりしようと意図する。このような説明には、行為の正当性を主張する言い訳や正当化が含まれる。この種類の説明で行われるのは中立的な記述ではなく、ある種の動機づけに基づいたものである。

因果的説明—帰属過程

古典的な帰属理論

上述のように説明にはいくつかのタイプがあるが、人間が行う説明の中で中心的な位置を占めるのが、因果的な説明、つまりある結果がなぜ生じたのか、結果を引き起こした原因は何かという説明である。その種の因果的説明は、原因帰属(causal attribution)の問題として、社会心理学を中心とする広い範囲で長く研究されてきた。古典的な帰属理論としては、一般人の素朴で直観的な心理を重視する立場から因果関係の認知に関する最初の理論的考察を行ったHeider(1958)の著述に始まり、対人認知における推論と関連づけて帰属を論じたJones & Davis(1965)の対応推論理論、原因の推論についての一般的な原則を提案したKelley(1967)のANOVAモデルと因果スキーマモデル(Kelley, 1972)、主に成功・失敗という結果を対象に、原因帰属の先行因とその結果について検討したWeiner(1979)の達成領域の帰属理論などがある。

またBem(1972)は、自己の内面についても他者の場合と同様の推論によって知識を得るとする自己知覚理論を提唱し、Schachter(1964)の二要因情動理論では、情動を経験するためには、生理的喚起と同時に認知的なラベルが必要だとされている。これらの理論はいずれも自己の内的状態の認知に推論の要素が含まれることを示唆しており、自己に関する帰属の理論であると考えることができる。

これらの理論では、主にどのような場合にどのような原因への帰属がなされるかという因果的推論の先行条件、推論の際に使われる情報の種類や既有知識の作用、推論の方式やルールなどが考察されたが、動機や感情の関与に関する検討は比較的少なく、基本的には認知的、情報処理的な側面に重きが置かれている。その他Weiner(1979, 1986)の理論では、原因帰属の結果、つまり原因が能力、努力、課題の性質や運などのうち、どの要因にあると推論されるかによって、その後の感情や期待の変化、あるいは動機づけにどのような影響が及ぶかについても検討されている。

帰属研究によって見出された傾向

上で挙げた古典的な帰属理論の多くは、実証的な研究結果から帰納的に構築されたものというよりは、合理的な人間が行うと想定される論理的基準を提示したような性格のもので、規範理論(normative theory)であると評されている。この傾向の最も著しいのは、Kelley(1967)の共変原理およびANOVAモデルであろう。そのため、人間が実際に行う原因帰属・因果推論について検討する実証的研究は、むしろ理論が提出された後に数多く行われることになった。これらは理論を検証される目的で行われたものも多いが、現実の人間の推論傾向がこれらの研究によって初めて明らかになったということができる。

実証的な研究結果から、理論的予測とは食い違う傾向や推論のバイアスが見出された。主なものとしては、Kelley(1967)のANOVAモデルにおける3種の情報のうち合意性情報が軽視されがちな傾向、行為者と観察者の帰属が異なる傾向、自分に都合のよい帰属(self-serving bias)などがあるが、中でも最も重要なものは、基本的な帰属のエラー(fundamental attribution error)と呼ばれる推論の偏りである。

基本的な帰属のエラーとは、他者の行動の原因帰属において、外的状況要因よりも行為者本人の内的な要因の方が過度に重視される傾向を指す。更にそれに伴って、本来は社会的要請や集団圧力、役割、規範などのような外的要因によって引き起こされた行動からも、その行動と対応する内的特性が推論されやすいというバイアスもみられる。この特性推論に関する偏りに関しては、特に対応バイアス(correspondence bias)という表現が使われている。例えば、まったくランダムに賛否を割り振られて議論するディベートのような場面でも、賛成の議論をした人は本当の態度も賛成、反対の側から議論した人は本心も反対であるかのように受け取られてしまう傾向がある。このバイアスは、きわめて広範な領域でみられる強固な推論傾向だと考えられている。つまり人の行動に関しては、その原因を本人の意図、感情、動機、態度や性格などの内面的な要因に帰する傾向が強く、外部の物理的、社会的環境の影響は過小評価されがちである。これは「基本的な帰属のエラー」と呼ばれるとおり、人間に普遍的な帰属の傾向であると考えられる。文化心理学では、このエラーが欧米に特有な傾向であるという主張がなされているが(例. Markus & Kitayama, 1991)、同じ実験パラダイムを用いた態度帰属の研究などでは、日本でもアメリカの研究と同様の結果が得られており(外山, 2001)、文化を超えた普遍性をもつ。

また、一般に偶然的な要因の関与を低く評定する傾向も広くみられる。スポーツなどでは、その場面の一時的・

偶発的な要因(気象条件や体調、試合内の攻守のタイミングなど)がかなり大きな役割を果たすと考えられるが、その種の要因の作用に関する人間の評定は一般に低く留まることが多い。これと関連して、まったく偶然に生じたランダム事象に対しても因果関係を認知したり、何らかの意味を伴った説明を行う事例は、日常生活の多くの場面でみられる。いわゆる「迷信」もこのような傾向に根差したものが多く、スポーツ等におけるジンクスやまじないのような儀式、ギャンブルに関しての誤った信念なども、偶然に意味を付与するという心理過程の表れと考えられる。これに関しては、後の節で改めて述べる。

帰属理論の発展

1970 年代以降の数多くの実証的な研究の成果に基づき、1980 年代後半から 2000 年代にかけて、古典的な帰属理論の修正や精緻化が行われ、認知過程の二重性の観点を取り入れた新たな理論も登場した。その中で影響力の大きな理論としては、Trope の 2 段階モデル(Trope, 1986)と Gilbert の 3 段階モデル(Gilbert, 1989)を挙げることができる。

Trope のモデルでは行動から特性を推論する過程を、行動の意味の同定(behavior identification)と特性推論(dispositional inference)の 2 段階に分けている。そして、行動と同方向の状況要因が、同定の段階では同化効果をもつが、推論の段階では抑止的に働くという形で、2つの段階において逆方向の影響力をもつことを予測した。

Gilbert(1989)は、行動の観察から始まる特性推論の過程を、カテゴリー化(categorization)、特徴記述(characterization)、修正(correction)の 3 段階に分けたが、そのうちで 2 段階目の特徴記述が行動と対応した特性推論に該当する。Gilbert によれば、カテゴリー化と特徴記述は認知的労力を要しない自動的過程であるが、最後の修正は意識的な過程であり、認知資源を必要とする。ここで仮定されているのは、カテゴリー化にひき続いて特性推論が自動的に生じ、その後になって状況等を勘案した割引が起こって、2 段階目で行われた推論が修正されるという順序であり、古典的な帰属理論で、まず原因の吟味がなされた後に特性推論が起こると仮定されてきたのに対して逆の順序のプロセスを提唱していることになる。このモデルでは、認知的資源が不足している場合には、最後の修正の段階が省略されると想定されており、態度帰属等で繰り返し見出されてきた対応バイアスを巧みに説明することができる。

このほかに、Kelley の ANOVA モデルの修正やその理論的展開も多数試みられている。例えば Orvis ら(Orvis, Cunningham, & Kelley, 1975)のテンプレート・マッチング・モデル、Jaspars ら(Jaspars, Hewstone, & Fincham, 1983)の帰納的論理モデル(inductive logic model)、Hilton & Slugoski(1986)の異常条件焦点モデル(abnormal conditions focus model)、Cheng & Novick(1990)の確率対比モデルなどである。これらのモデルでは、因果推論を分散分析になぞらえた Kelley の ANOVA モデルの難点を指摘したり、現実に用いられるより簡便な推論の方式を提唱したり、あるいは知覚者がすでにもっている既有知識や常識などが因果推論に果たす作用を考慮に入れる試みなどを行っている。

因果関係とその認知に関する諸問題

帰属研究の進展に伴って、因果関係に関連するいくつかの問題が浮かび上がってきた。その中には、「原因」とは何かという根源的な問い、原因と理由の区別およびそれらに対応する説明の違い、内的帰属 vs.外的帰属という枠組み、およびその基底にある内的原因 vs.外的原因という分類軸の妥当性に関する疑問、原因の時間的連鎖の問題などが含まれる。

原因と理由

帰属研究においては、原因の推論・因果的な説明を対象にしながら、そもそも原因とは何であるかについての考察が十分であったとは言いがたい。この点を最初に指摘したのは、「原因(cause)」と「理由(reason)」の区別を明確にすべきだと主張した Buss(1978)であった。Buss によれば、「原因」と「理由」は行動の異なった側面を説明するための、論理的に別個のカテゴリーである。原因は「変化を引き起こすもの」であり、人間の意図的でない行動(occurrence と呼ばれる)に対して、行為者、観察者の両者の説明で用いられる。それに対して理由は「そのために変化が引き起こされるところのもの」であり、行為者本人が意図的な行動(action)に対する説明で用いるものであるとされている。観察者は意図的な行為に対して、原因と理由の両方を用いるとされる。英語の"cause"と"reason"がそのまま日本語の「原因」と「結果」に対応するか否かにやや疑問はあるものの、日本語の日常用語でも、例えば「私が心理学科を選んだ理由は…」という表現は自然であるが、「私が心理学科を選んだ原因は…」という表現は奇異に感じられる。理由による説明はそれまでの帰属理論の中で重視されてこなかったが、Buss は従来の理論の論理的曖昧さを指摘し、原因と理由による二種類の説明の区別が重要であると主張している。

また Malle(1999, 2004)は従来の帰属理論の問題点を指摘して、新たな理論的な枠組みを提案したが、そこでは理由による説明と原因による説明のうち、人間の意図的な行動に対する理由による説明が重視されている。Malle によると、非意図的行動は機械的(mechanical)な原因(心的状態、特性、他者の行動、物理事象など)によって引き起こされるものとして説明される。従来の帰属理

論が対象にしてきたのは主にこの部分であると考えられる。意図的行動は行為者の意図によってもたらされ、主に理由によって説明されるが、それ以外に、理由の背後にあるともいえる「理由の因果歴(causal history of reasons)」と、「可能化因子(enabling factor)」による説明もあり、全部で 3 種(原因も含めれば 4 種)の説明の方式がある。

「理由」は主観性と合理性という特質をもつ。つまり理由説明は、行為者の主観的な願望や信念に言及するという特徴があり、また理由として挙げられた願望や信念などは、意図や行為が適切なものであるという合理的な支持を与えるような首尾一貫したものでなければならないという特徴をもつ。これに対して、「理由の因果歴」による説明とは、特定の理由ではなく、その背後にある傾性(disposition)や過去経験、文化、状況手がかりなどに言及する説明である。例えば、「アンはフレンドリーな人だから、ベンを夕飯に招く」という説明が例に挙げられている(cf. Malle, 2005)。さらに「可能化因子」による説明とは、行為が意図されたとおりに実現することを可能にする要因に言及するもので、行為者の技能、努力、周囲の促進的状況などがその例となる。

以上のような 4 種類の説明方式のうちどれが実際に用いられるかは、どのような条件によって決定されるであろうか？Malle(2005)によると、そこには認知的な条件と動機的条件の両方が関与している。まず「原因」による説明がなされるのは、上にも述べたように、行動が意図されたものでないと知覚される場合、また動機づけに関連する条件としては、社会的に望ましくない行動に対する非難を制御しようとする場合が挙げられている。これは行動が意図しなかったものであるとすることによって、非難を避けたり減じたりすることができるからである。

意図的な行動に関する説明については、「何のために？」という問いに対する答えが理由説明であり、説明する人が行為者についての具体的な情報をもっていることが必要である。より一般的な「なぜ？」に対する答えは「理由の因果歴」による説明であり、これは説明者が、行為者と行為についての一般的な情報はもつものの、特定の行為者が特定の行為を行うことに関する具体的な情報はもっていない場合が該当する。理由の因果歴による説明は、自己の行動を説明する際よりも、他者の行動の説明の際に多く用いられる。そして最後に、可能化因子による説明は、「どうして可能になったのか？」という問いの説明であり、困難な行動や極端な行動に対して与えられることが多いとされている。

Malle の理論では理由説明が重視され、対人認知における最大の課題は、他者が何をしようと意図しているかを知ることだと考えられている。従来の帰属理論において、より持続的な特性や傾性を推論することが重要だとされてきたのと対照的であるが、現実にはその場面での対人認知の目標により、両者の相対的な重要性は変わるものと考えられる。また短期的な目標が意図の推定であっても、それが積み重なることによって、長期的に持続する特性・傾性・能力などが推論されることになるのではないだろうか。一時的な意図や感情状態の推論と、持続的な特性・傾性の推論のどちらが重要かは、その他者に対する関心や対人関係の持続性によって異なってくると考えられる。

内的帰属−外的帰属

人の行動の原因を行為者の個人的特性や状態に帰するか、あるいは外部の環境・状況に帰するかという、内的帰属-外的帰属の区分は、Heider(1958)以来、帰属の基本的次元として広く用いられてきた。しかし内的-外的の区別が、単なる表現の差や視点の違いを反映しているだけに過ぎないのではないかと考えられる場合もある。例えば、「その会社は給料が高いので、彼はその会社に応募した」と表現するならば、原因は会社の側にあるものとして外的帰属と解釈されるかもしれないが、「彼は給料や待遇を重視する人なので、その会社に応募した」と表現するならば内的帰属に分類されるかもしれない。

Heider 以来、内的帰属と外的帰属の間には相補的な関係があると想定されてきた。つまり外的帰属の傾向が強まるにつれて内的帰属の程度は小さくなるというような関係である。しかし現実には、内的帰属と外的帰属の測度の間には必ずしも負の相関が見いだされるわけではなく、両方の種類の原因がともに作用していると認知される場合もある。

内的-外的帰属という二分法に対する疑問は過去に何度も提起されており、Kruglanski(1975)は、内的-外的に代わるものとして、endogenous(内生的) - exogenous(外生的)という次元を提案している。Endogenous な帰属とは、ある行動がそれ自体目的であると判断されるような場合であり、exogenous な帰属とは、その行動が更なる目的のための手段になると判断される場合にあたる。Kruglanski はこの区分が従来の内的-外的帰属の区別に置き換わると想定していたが、現実にはその後の研究ではあまり用いられることなく、相変わらず、内的-外的帰属の枠組みが使われ続けている。その理由としては、さまざまな批判はあるものの、内的-外的帰属、あるいは内的-外的原因という区別が、人間の特性に関する判断や責任の認定などの際に有用であるという事情があると思われる。

原因の遡求とその停止

現象の因果的説明は、直接の引き金になった直前の原因を挙げるだけでは不十分なことがある。人の死を説

明する際に、心臓の動きが停止したとか、脳が酸素不足になったというような原因を挙げても、納得のいく説明とは感じられないであろう。なぜ心臓が止まったのかを説明する必要がある。因果関係には原因の連鎖が想定される場合が多い。1つの原因にはさらにその原因となる要因がある、というように、先行する原因が存在するケースである。そのような場合、当該の結果は単一の原因のみで説明されるわけではなく、直接の原因からその背後にある原因、それをまた引き起こした原因…と過去にさかのぼって原因を追究するというプロセスが生じると考えられる。

原因の連鎖の問題は、事故に対する責任帰属の問題を巡って、Brickman ら(Brickman, Ryan, & Wortman, 1975)が検討して以来、いくつかの分野で研究されている。そこでは、直前の原因と遠因のどちらがどのような場合に重視されるか、個人側の原因と環境側の原因とで違いがあるのか、などが検討されてきた。Brickman らの研究では、内的原因の連鎖では直前の原因が、外的原因の連鎖では先行する遠因が重視されるが、近因と遠因の方向が異なる場合には、反対方向の遠因を示唆されることにより、近因の効果が打ち消されることが示された。最近の研究で Hilton ら(Hilton, McClure, & Sutton, 2010)は、物理的な事象に関しては近因の方が選好されやすいが、遠因が人間の意図的な行動である場合には、自然や物理的原因の場合よりも原因の遡求が起こりやすいことを明らかにしている。

原因の連鎖に関する研究の多くでは、実験的に近因と遠因に関する情報を与えて参加者の判断を比較するような形式になっているが、現実場面での因果推論では、1つの原因だけでは十分説明されないと感じられる場合に、時間を遡って更に先行する原因を追究する過程が生じると思われる。その際には、どこまで遡れば満足な結論に達して、それ以上の遡求が停止されるのかという点が重要になるであろう。原因の遡求が開始される条件と停止される条件の双方を検討する必要があると思われる。

異なった種類の「説明」

至近要因と究極要因　今まで述べてきた種類の説明あるいは原因帰属はすべて、何らかの結果が生じた後で、それを引き起こしたと考えられる先行条件や要因を探し、それを原因と判定して説明を行うという形のものであった。これは一般人つまり素人が行う因果推論および説明であるが、従来行われてきた学問的な説明も基本的には同様に、現象に先立つ諸条件を検討した結果、原因とみなされるものを突き止めるという方向のものであった。しかし近年、進化心理学的な観点から人間および動物の行動に関して説明が行われるようになり、そこでわれわれは従来とは異なった種類の説明に遭遇することとなった。これが究極要因(ultimate cause)による説明で、従来の説明で一般的であった至近要因(proximate cause)による説明と対比される。至近要因による説明は、ある行動や結果を引き起こす直接の原因、メカニズムによる説明であるが、究極要因による説明は、ある行動が果たす機能やそれがもたらす結果によって説明するものということができる。例えば鳥のさえずりがなぜ起こるかを至近要因から説明するならば、鳥の喉の構造や脳の構造を前提として、季節が春になって日照時間が長くなることが直接の引き金となり、脳の中の松果体で感知された日照時間の変化が雄性ホルモンであるテストステロンの分泌を促し、それが脳のさえずり中枢を刺激して、さえずり行動を起こすというような説明になる(長谷川, 2002)。それに対して、同じ行動を究極要因によって説明する場合には、鳥のオスのさえずり行動がもつ機能と意味によって説明することになる。具体的には、縄張りの獲得と宣言、および異性であるメスに対して自らの魅力を誇示するという機能が挙げられる(長谷川, 2002)。つまり、さえずり行動によって、オス同士の競争に勝利して縄張りを獲得し、さらに美しく複雑なさえずりによってメスをひきつけることができれば繁殖の成功につながるため、さえずり行動が進化的に引き継がれてきたということになる。

ちなみに、至近要因と究極要因は Tinbergen が挙げた 4 種類の説明のうちの2つであり、残りの2つは発達要因と系統進化要因である(cf. Tinbergen, 1963)。

アリストテレスによる原因の区分　原因あるいは因果関係については、古代ギリシャ以来、さまざまに考察され、論議されてきた。アリストテレス(Aristoteles, 350 B.C.)は原因を、ある事物の生成のために必要な諸条件という意味に捉え、①形相因(formal cause)、②質料因(material cause)、③始動因(efficient cause)、④目的因(final cause)という 4 つの種類を区別した。このうち、①と②は、事物の形と材料を指すもので、現在の用法での原因には当たらない。従来、多くの科学研究で問題にされてきた原因は③の始動因に該当し、前項で述べた至近要因は、ほぼこれに対応すると考えられる。

説明の心理的機能

以上、主に因果的説明に関連して、因果関係および原因にまつわる問題について述べてきたが、最後に、一般の人々が行う説明が果たす心理的機能と、説明を行うことが後続の心理過程に及ぼす効果について考えておきたい。まず、説明の心理学的重要性について、続いて説明がもたらす効果について述べる。

説明を求める心理的傾向

身の回りに起こるさまざまな出来事に対して、その意味を問い、原因を知ろうとすることは、人間のきわめて根源

的な心理的傾向である。政治・経済状況、事件・事故・災害などのような社会規模の事象から、日常場面での他者の言動や自らの行動や感情の動きのような個人レベルの出来事に至るまで、その原因とそれが生起する機序を探り、意味を理解しようとすることは自然であり、また生活していく上で重要な役割を果たす。それによって、一見不可解に思われる事柄に対して筋の通った理解を得ることが可能となり、自分を取り巻く世界の中に秩序と一貫性を見出すことができる。説明を求める傾向は広範な対象に向けられるが、特に思いがけない出来事が起こったとき、失敗やネガティブな結果が生じたときに、原因を追究しようとする因果的推論が起こりやすいとされている(Weiner, 1985)。原因をつきとめ、発生条件を特定することができれば、将来の予測が可能になり、事象に対処したり、コントロールしたりすることが容易になるであろう。原因不明の病気や説明できない事象は不安をもたらす。それを解消するために、科学者は原因究明の努力を重ね、筋道の通った説明が可能になるよう研究を行ってきた。一般の人々も、自らの知識と能力の範囲でさまざまな現象の説明を試みている。

説明の行き過ぎ

上述のように、説明は不可解であったことに解決を与え、混沌とした世界に秩序を与えるものであるが、適切な説明に到達することは必ずしも容易ではない。それでも何らかの説明が求められる場合、誤った説明や行き過ぎた説明が行われることもある。このような説明の例としては、ジンクス、迷信、誤った思い込みなどがある。例えば、同じ職場で何人か続けて病人が出たりすると、「何かのたたりではないか」という噂がたつことがある。また 1 年目に大活躍して新人王の表彰を受けた選手が 2 年目には振るわないとか、1 作目で大成功を収めた作家が 2 作目は凡庸である場合などに、「2 年目(2 作目)のジンクス」という表現が使われることもある。そして、それに対して、「1 年目の好成績に気をよくして練習を怠った」とか、「1 作目で燃え尽きてしまった」などという説明がなされることも少なくない。これらは、本来は偶然に起こった出来事、あるいは「回帰」のような統計的現象であるものに対して、「もっともらしい」説明が考案されたケースと考えられる。またバスケットボールの試合などでも、続けてショットに成功した人は「hot hand である(波に乗っている)」と見なされて、他の選手がその人にボールを回す傾向が強まるという現象も指摘されている(Gilovich, Vollone, & Tversky, 1985)。これらは、偶然に起こった出来事やランダム事象に対して意味を見出そうとする傾向を反映したものと考えることができる。前にも述べたように、人は偶然要因による説明を好まず、また統計的な現象であるという無味乾燥な説明も避けることが多く、何らかの意味を含んだ「もっともらしく」、「面白い」説明を好む傾向がある。

説明がもたらす心理的効果

説明内容に依存する効果　説明を行うことは後続の心理過程にさまざまな効果をもたらす。そのような効果の中で、どのような内容の説明が行われたかに依存する効果と、説明自体がもたらす効果を区別する必要がある。まず、どのような説明がなされるかに伴って効果が異なる側面としては、Weiner(1979, 1986)が達成結果に対する原因帰属に関して指摘したものを挙げることができる。それによれば、同じ成功や失敗の経験であっても、それをどのような原因に帰属するかによって、その後の感情や将来の結果期待が異なり、さらに動機づけや後続の行動にも影響が及ぶ。一般に、内的-外的という原因の所在は感情反応と関連し、安定性の次元は将来の予測、成功-失敗の期待につながるとされる。たとえ失敗したとしても、それを努力不足のような不安定で統制可能な原因に帰属した場合には、やる気を失わずに次の機会に力を注ぐことができるであろうが、全般的な能力不足のような安定的で統制不可能な原因に帰属した場合には将来の期待が低下し、絶望感も強い場合には動機づけが失われ、うつ状態に陥ることもある。

説明自体のもたらす効果　説明の内容、原因帰属のあり方によって、その後の心理過程や行動が影響を受けることは、達成場面以外でもいろいろ知られているが、説明を行うこと自体が後の心理過程に及ぼす効果も存在する。Wilson は、人が自分の内面を正確に内観して、内的状態や自己の行動理由の説明を行うことは困難であるということを一貫して主張している(Wilson, 2002; Nisbett & Wilson, 1977)。人は自らの選好や行動の理由を尋ねられた際には何らかの回答を試みるが、それは自分の内面を振り返った結果ではなく、一種の暗黙の因果理論によるものだと考えられる。つまり、結果に見合った原因を探し、もっともらしいストーリーによる説明を行うことになる。このように、本来、意識化し言語化することが困難な内的状態を無理に意識的に説明することは弊害を生じ、後の心理過程がその説明に適合する方向に変化してしまうことが知られている(Wilson, Kraft, & Dunn, 1989 他)。

前にも述べたように、説明を行うことは、それまで理解不能で混沌とした状態であったものに、意味と秩序をもたらすものであり、安定した認知を得ることを可能にするというプラスの価値をもつ。適切な説明を得ることによって物事が理解できた、納得したという感覚が生じ、また将来の予測や将来に向けての行動的対応も準備することが可能になる。ただその反面、本来は特別の意味のない偶然的な事象を過度に説明しようとすることから生じる誤謬や、意識化困難な原因や理由を無理に言語化することの負の効果にも注目しなければならない。つまり説明の心

理的機能を検討する場合、プラスの効果とマイナスの効果の両方を考慮に入れなければならないであろう。

日常生活で一般の人々が行う説明については、さまざまな方向から研究がなされてきたにもかかわらず、相互の連携が十分でなく、異なった視点を統合する試みが乏しいことが指摘できる。今後は、より社会的・対人的な文脈で行われる説明についての検討を含めて、幅広く、統合的な研究が行われることが望まれる。

引用文献

Antaki, C. (Ed.) (1981). *The psychology of ordinary explanations of social behavior.* London: Academic Press.

Antaki., C., & Fielding, G. (1981). Research on ordinary explanations. In C. Antaki (Ed.), *The psychology of ordinary explanations of social behavior* (Pp. 27-55). London: Academic Press.

Aristoteles (350 B.C.) *Physik* Band 2 (田中美知太郎編 (1966)『アリストテレス』世界古典文学全集 *16* 筑摩書房 pp.328-329 より引用).

Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.6, Pp.1-62). Academic Press.

Brickman, P., Ryan, K., & Wortman, C. B. (1975). Causal chains: Attribution of responsibility as a function of immediate and prior causes. *Journal of Personality and Social Psychology, 32*, 1060-1067.

Buss, A. R. (1978). Causes and reason in attribution theory: A conceptual critique. *Journal of Personality and Social Psychology, 36*, 1311-1321.

Cheng, P. W., & Novick, L. R. (1990). A probabilistic contrast model of causal induction. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 545-567.

Gilbert, D. T. (1989). Thinking lightly about others: Automatic components of the social inference process. In J. S. Uleman & J. A. Bargh (Eds.), *Unintended thought* (Pp. 189-211).New York: Guilford Press.

Gilovich, T., Vollone, R., & Tversky, A. (1985). The hot hand in basketball: On the misperception of random sequences. *Cognitive Psychology*, *17*, 205-314.

長谷川眞理子 (2002). 生き物をめぐる4つの「なぜ」集英社新書

Heider, R. (1958) *The Psychology of interpersonal relations*, New York: Wiley.

Hilton, D. J., McClure, J. M., & Sutton, R. M. (2010). Selecting explanations from causal chains: Do statistical principles explain preferences for voluntary causes? *European Journal of Social Psychology*, *40*, 383-400.

Hilton, D. J., & Slugoski, B. R. (1986). Knowledge-based causal attribution: The abnormal conditions focus model. *Psychological Review*, *93*, 75-88.

Jaspars, J., Hewstone, M., & Fincham, F. D. (1983). Attribution theory and research: The state of the art. In J. Jaspars, F. D. Fincham, & M. Hewstone (Eds.), *Attribution theory and research: Conceptual, developmental, and social dimensions* (pp. 3-36). Academic Press.

Jones, E. E. & Davis, K.E. (1965). From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol.2, Pp.219-266). Academic Press.

Kelley, H. H. (1967). Attribution theory in social psychology. In D. Levine(Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation* (Vol. 15, Pp. 192-240). Nebraska University Press.

Kelley, H. H. (1972). Causal schemata and the attribution process. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner(Eds.) *Attribution; Perceiving the causes of behavior*. Morristown (Pp.151-174). NJ: General Learning Press.

Kruglanski, A. W. (1975). The endogenous-exogenous partition in attribution theory. *Psychological Review*, *82*, 387-406.

Malle, B. F. (1999). How people explain behavior: A new theoretical framework. *Personality and Social Psychology Review, 3*, 23-48.

Malle, B. F. (2004) *How the mind explains behavior: Folk explanations, meaning, and social interaction*. MIT Press.

Malle, B. F. (2005). Folk theory of mind: Conceptual foundations of human social cognition. In R. Hassin, J. S. Uleman & J. A. Bargh (Eds.) *The new unconscious* (pp.225-255). NY: Oxford University Press.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*, 224-253.

Nisbett, R. E., & Wilson, T. D. (1977). Telling more than we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, *84*, 231-259.

Orvis, B. R., Cunningham, J. D., & Kelley, H. H. (1975). A closer examination of causal inference; The role of consensus, distinctiveness, and consistency information. *Journal of Personality and Social Psychology, 32*, 605-616.

Schachter, S. (1964). The interaction of cognitive and physiological determinants of emotional state. In Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 1, Pp.49-82). Academic Press.

Tinbergen, N. (1963). On aims and methods of ethology. *Zeitschirft für Tierpsychologie*, *20*, 410-433.

外山みどり (2001). 社会的認知の普遍性と特殊性－態度帰属における対応バイアスを例として－対人社会心理学研究, *1*. 17-24.

Trope, Y. (1986). Identification and inferential processes in dispositional attribution. *Psychological Review*, *93*, 239-257

Weiner, B. (1979). A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology. 71*, 3-25.

Weiner, B. (1985). "Spontaneous" causal thinking. *Psychological Bulletin*, *97*, 74-84.

Weiner, B. (1986). *An attributional theory of motivation and emotion*. Springer.

Wilson, T. D. (2002). *Strangers to ourselves: Discovering the adaptive unconscious*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press.

Wilson, T. D., Kraft, D., & Dunn, D. S. (1989). The disruptive effects of explaining attitudes: The moderating effect of knowledge about the attitude object. *Journal of Experimental Social Psychology*, *25*, 379-400.

註

1) 本研究には、平成 25-28 年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号 25380850)の交付を受けた。

Some problems with the psychological function of ordinary explanation

Midori TOYAMA (*Faculty of Letters, Gakushuin University*)

This article attempts to review previous research on ordinary explanation and to indicate some problems with theoretical and empirical aspects of research in this field. Among several types of explanation, causal explanation has been most widely studied as the process of attribution. A number of theories and models have been proposed and many empirical studies have been conducted to elucidate the process of inference and causal explanation. However, there are several unsolved problems left, for example, cause-reason distinction, internal-external dimensions in attribution, and judgments in causal chains. Nowadays, the evolutionary perspective provides an explanation for human behavior in terms of ultimate causes. The distinction between proximate and ultimate causes must be noted. With regard to psychological function, explanation might have both positive and negative consequences. While on the positive side, people find meaning and stability in the chaotic world by explanation, they often commit errors in giving too much interpretation to random events. The implications for future research on psychological meanings of explanation are discussed.

Keywords: attribution process, causality, reason, description, misperception.